

- 対象地域
広島県山県郡北広島町
(西中国山地国定公園)
- 設立日:H16.11.7
- 構成員数:31人
- 全体構想作成日:H18.3.31
- 実施計画作成日:H18.10.30
(R3.4月現在)

やわたしつげんしぜんさいせいきょうぎかい

八幡湿原自然再生協議会

再生 目標

「命の環 つなげる」をキャッチフレーズに、牧草地造成前の昭和30年代前半頃の湿原生態系を再生する。

本地域は、広島県の北西部に位置し、1,000m級の山に囲まれた標高800mの盆地です。また、ヌマガヤーマザミ群集に代表される中間湿原が点在し、自生のものとしては貴重なカキツバタが生育しています。

しかし、牧場化に伴う排水施設や道路の整備が原因と思われる湿原の乾燥化により、周辺部からアカマツやイヌツゲ等の木本類が侵入し、希少種の生育環境が悪化しています。このため、自然生態系の保全・再生のための計画を作成、湿原環境の再生に向けた取り組みを進めています。



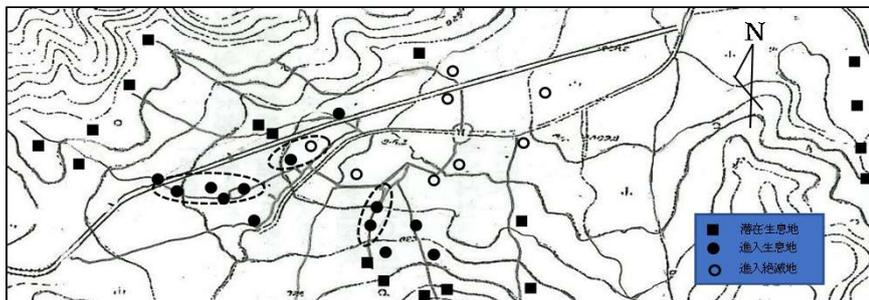
【事務局】

730-8511
広島市中区基町10-52
広島県自然環境課
野生生物グループ内
電話:082-513-2933

活動報告

止水性小型サンショウウオの生息地は出来たか 【報告者】内藤 順一

2009年に土木工事が終わり、以降、13年間、止水性小型サンショウウオの生息状況を記録してきた。図の■は事業地周辺の潜在生息地を表し、●は2022年に確認された事業地内の生息地を表し、○はこれまでの調査で幼生を確認したものの、今回の調査で確認できなかったポイントを示している。事業地を取り囲むように潜在生息地が多くあることが解かる。2006年作成の「八幡湿原自然再生事業実施計画」(広島県)では、植物の管理に関しては詳しく説明してあるが、動物に関する記述は極めて少ない。湿地・湿原環境ができれば、動物は復元できると考えていたと推察される。



2009年～2022年までの止水性小型サンショウウオの生息状況

霧ヶ谷湿原の再生方法は、コンクリート水路に取水堰を設置し、そこから、左右に幹線導水路へ配水し、その水が地中に浸透して補助導水路を満たし、湿原化を図るという計画であった。だから、幹線導水路や補助導水路は等高線に添って水平に掘削される必要があったと考えられるが、現状では地中に浸透することは殆どなく、また、梅雨や台風による毎年の出水により、取水堰が堆積物によって塞がれ、幹線導水路に取水されなくなった。「事業実施計画」では、堆積物によって湿地が形成されると記述されているが、現在も湿地にはなっていない。

止水性小型サンショウウオの生息地は、幹線導水路や補助導水路から越流した「縦」の流れである。そうしたポイントではスゲ類やキセルアザミが卓越し、湿地環境ができている。

○で示した位置は、潜在生息地から幼生が事業地に流れ込んで生息地になったと考えられるが、その下流域には○が目立つ。一時は幼生が流下したにもかかわらず、生息地になり得なかったと考えることが出来る。おそらく、変態期(8月上旬)まで滞水がなかったと推察される。「水位観測データ」では、事業地の多くが「森林化が進む可能性が高い」とされている。最新の知見を用い、検討する必要がある。「八幡湿原自然再生事業・霧ヶ谷湿原」は研究者の実験材料であってはならないと思う。



～止水性小型サンショウウオ調査の様子～